

企画展

# 鳥居龍蔵の学問と世界



令和3年

2.13<sub>土</sub> - 3.21<sub>日</sub>

会場：文化の森 多目的活動室

- 主催：徳島県立鳥居龍蔵記念博物館／徳島県立博物館
- 協力：国立民族学博物館

## プロローグ

## 鳥居龍蔵の生涯と学問

2020年度は、鳥居龍蔵（1870-1953）の生誕150周年という節目であり、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館（以下当館）の開館10周年にもあたる。

鳥居は生涯を通じて、台湾、中国西南部、中国東北部、朝鮮半島など東アジアを中心に、考古学・民族学・人類学的調査を精力的に行い、次々と成果を発表した。彼が生涯をかけて追求めた学問は、主要なテーマである日本人の起源についての研究と、それ以外の多様な視点による研究に大別することができる。

この展示では、当館が開館以降10年間に確認した資料を中心に、鳥居の学問とその世界について紹介したい。



# I 日本人の起源を探る

鳥居龍蔵は、東アジアを中心に、考古学・民族学・人類学的調査を精力的に行いながら、日本人の起源を探っていった。

彼は、千島アイヌの調査結果から、日本列島の先住民族がアイヌ（今日のアイヌとは概念が異なる）であると確信した。また、中国東北部と朝鮮半島での調査結果から、これらの地域からやって来た人々が日本人の祖先の主たる構成要素となったと結論づけ、これを「固有日本人」と名付けた。一方、台湾・中国西南部での調査結果から、インドネシア（台湾以南の島嶼部に住む人々）とインドシナ民族（インドシナ半島から中国西南部あたりに住む人々）の影響も見いだされるとした。このようにして、東アジアや東南アジアからの段階的な人々の移動によって、日本人が形成されたと結論づけたのである。

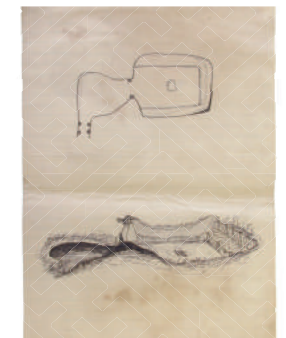
鳥居は、なぜ周辺民族の移動により日本人が形成されたと考えたのであろうか。その経緯をたどってみたい。



日本人起源論のイメージ図

## 1 先住民族を「アイヌ」と確信する

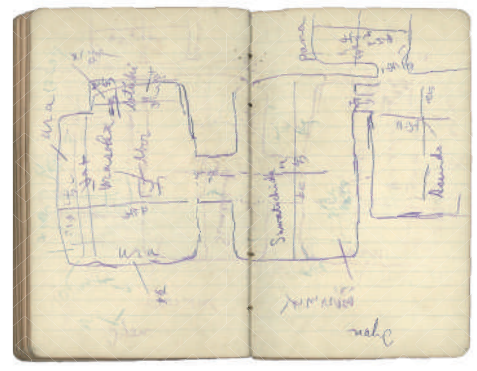
日本の石器時代の住人である先住民族をめぐって、明治期の人類学界では、これをアイヌであるとする説と、アイヌの伝説に出てくるコロボックルであるとする説が対立し、論争が行われていた。これを「コロボックル・アイヌ論争」と呼ぶ。アイヌ説は、アイヌが昔、竪穴住居に住み、石器や土器を使用していたと考え、北海道で出土する土器と同様のものが、本州以南でも発見されることなどを根拠とした。一方、



千島アイヌの竪穴住居跡の平面模式図とスケッチ

コロボックル説は、コロボックルがアイヌより以前から北海道に住んでおり、竪穴住居に住み、石器や土器を製作・使用していたとした。彼らはアイヌと交易があったが、ある時期に突然姿を消してしまったとされていた。

この論争の最中の1899（明治32）年、鳥居は東京帝国大学から千島列島に派遣された。最北端のシュムシュ島で発掘調査を行い、シコタン島では千島アイヌの民族学的・人類学的調査などを行った。その結果、コロボックル説の主張とは異なり、千島アイヌがかつて竪穴住居に住み、石器や土器を製作していたことを確認した。こうして、彼は、日本の先住民族をアイヌであると確信したのである。



フィールドノート  
鳥居による竪穴住居跡調査時のスケッチとメモ

## 2 「固有日本人」を発見する

ここでは、「固有日本人」の確認にいたる経緯について概観したい。彼はいかにして、北東アジアに起源を持つ民族の日本列島への移動に気づき、独自の学説を形成していったのであろうか。その故地とされる中国東北部（満州）・内モンゴルや朝鮮半島の調査から、学説形成の様相を確認していこう。

鳥居の満州・内モンゴルでの調査は、前後14回にも及ぶ。生涯で最も多く脚を運んだ地域であるが、「固有日本人」との関係からは、第1回から第4回までの初期の調査が重要である。第1回は、1895年に日清戦争の結果、清国から日本に割譲された遼東半島における調査である。鳥居にとって初めての海外調査であり、言語の通じないなか、ひたすら歩き回ったという。その過程で確認したものの一



中国東北部での発掘調査風景  
東京大学総合研究博物館蔵



南満洲調査報告（1910年）  
左は報告書表紙。右は土器紋様の図版。

ている。その成果は、翌1910年に刊行された『南満洲調査報告』にまとめられた。そこには、満州石器時代の土器紋様は直線を基軸とし、それに円点、方点、三角点等が交叉し幾何学的紋様をなしていること、そしてそれが、日本で出土する「弥生式土器」の紋様と一致することへの言及がみられる。満州と日本列島に見られる「土器の類似」に関する指摘であり、これらの遺物の間に、何らかの民族的なつながりがあるとの推測を示したのである。

以上の、満州方面での初期の調査によって得られた推測を、実証レベルに引き上げていったのが、1910年以降、1916年まで、朝鮮総督府からの委嘱を受けてほぼ毎年実施された朝鮮半島調査である。その成果には、朝鮮の石器時代には、日本のような「縄文式石器時代」が存在しないこと、また一方で、朝鮮半島出土の土器と日本の「弥生式土器」とは深い関係があるとの認識が明瞭に示されており、この時点で、「固有日本人」論の骨子が固まりつつあったことが分かる。

鳥居の朝鮮半島調査の正式な報告書は、諸般の事情で、第5回調査に関する『平安南道・黄海道古蹟調査報告書』を除いて刊行されていない。同報告書が、当時の様子を具体的に把握する数少ない手がかりとなるが、その記述は、遺物、遺構単位でまとめられたものであり、時系列に調査行程を追うことはできない。従来から、調査期間中に、鳥居が人類学者・石田収蔵（1879-1940）宛てに現地から送った8通の絵はがきが具体的な行程を知る縁となっていた。そのようななか、近年の当館における資料整理の過程で、同時期に鳥居が妻・きみ子宛に投函した37通の絵はがきが確認され、先の「石田宛書簡」と合わせて、調査の詳細な行程が把握できるようになりつつある。



学位論文「満蒙の有史以前」草稿

つが、熊岳城で採取した石槍、石斧などの石器であり、これが満州における「石器時代の発見」となった。第2回調査は、その10年後、日露戦争に伴うポーツマス条約の締結直後に行われている。調査内容は多岐にわたるが、特に普蘭店近郊の鍋底山山麓での調査が注目される。この地域からは、石器とともに大量の土器の出土を確認するが、その形態や文様は、日本で出土する縄文土器とは、全く異なる別派のものであった。これが、後年に提唱する「固有日本人」の使用する「土器の発見」となる。1907年～1908年にかけて、妻・長女とともに内モンゴル調査に従事した後、1909年には三度、遼東半島から満州方面を訪れ、旅順近郊の老鐵山を振り出しに、先述の普蘭店や熊岳城等を再訪し、多くの石器、土器を採集し



朝鮮半島の鳥居龍蔵から妻・きみ子に送られた絵はがき

満州・内モンゴル及び、朝鮮半島調査の石器時代に関する調査成果は、論文「満蒙の有史以前」に結実する。この研究により、鳥居は文学博士の学位を授与されるのであるが、論文自体は滅失しており、その概要が伝わるのみである。当館には、「失われた学位論文」の草稿と思われる原稿の一群が存在する。その内容の確認と検討が今後の課題である。



### 3 南方からの影響を見いだす - インドネジアンとインドシナ民族の移動 -

鳥居は、1896 (明治 29) 年～1911 年に台湾で 5 回にわたって調査を行い、貝塚や巨石構造物などの考古学的調査から、この地域における石器時代の存在を確認した。また、原住民族の生活習慣や言語などの調査から、大きく 9 つの部族に分けることができるとした。特に、鳥居は、1897 年の紅頭嶼 (現 蘭嶼) 調査で、ヤミ族 (現 タオ族) が馬來種族 (後にインドネジアンと呼ぶようになった。p. 2 参照) であることを確認し、フィリピンから台湾へと北上して来た結果であると考えた。

また、ブヌン族の伝承に「小人」がいたという言い伝えがあることから、鳥居はこれを、中国西南部に住む背が低い体型に特徴がある苗族のような人々ではないかと考えた。さらに、台湾北部の山岳地帯に居住するタイヤル族がインドシナ民族である苗族に似ているという説が、海外で発表されたことを知り、鳥居はこれまでの調査結果等と合わせて、台湾には、まず、彼がインドシナ民族であると推測する苗族などが中国西南部から渡来し、続いて馬來種族が南方から移って来て、台湾全域に住むようになったという仮説を立てたのである。

このようなことから、鳥居は、台湾の原住民族研究を進めるために、中国西南部の貴州省などに住む苗族をはじめとする少数民族調査の希望を、東京帝国大学に提出した。



紅頭嶼の集落  
1897 年に撮影

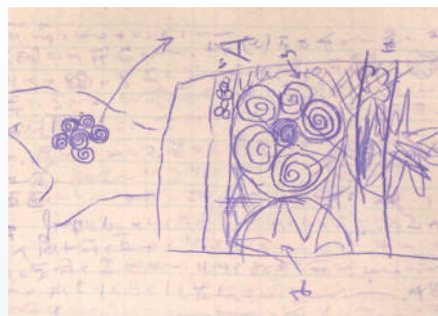


台湾の山岳地帯に住む原住民族の男性  
1900 年に撮影

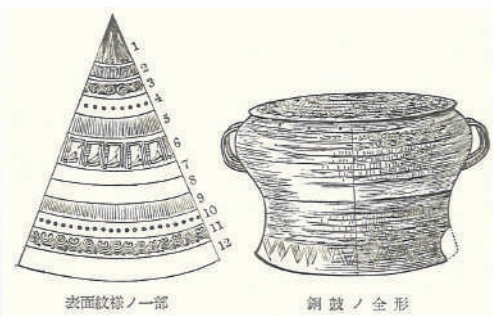
鳥居は、1902 (明治 35) 年 7 月から翌年 3 月にかけて中国西南部で実地調査を行った。苗族がインドシナ民族であると推測をしていた鳥居は、調査をきっかけに、その推測を確信へと変えていくようになる。

鳥居の苗族調査は、髪型、皮膚の色、体格、言語、家屋、宗教、風俗などに及ぶものであったが、調査の中で鳥居は、苗族の衣服に着目する。苗族の衣服には、渦巻、幾何学、円形などの模様が施されており、それらは彼らが使用する銅鼓の模様と類似していると認識したからである。さらに、鳥居は、衣服や銅鼓の模様には、日本の銅鐸の模様と共通するものがあると指摘した。

鳥居は、持ち帰った銅鼓を中心に研究を進めていき、苗族の銅鼓と、日本の銅鐸との類似点を見出していき。そして、苗族と日本との関係を考察し、インドシナ民族である苗族を、日本人の構成要素の一つと考えるに至ったのである。



フィールドノート  
鳥居が苗族の衣服の模様をスケッチしたもの



銅鼓の形状・紋様  
『苗族調査報告』(1907年)より



銅鼓・銅鐸関係のメモ  
銅鐸に関する知見をまとめたもの

### 4 日本人起源論の確立

#### 【近畿地方で石器時代を探る】

鳥居は、東アジアを中心に現地調査を行う一方で、日本国内の遺跡についても本格的に調査を開始する。その契機は、次のとおりである。

大正初年頃、近畿地方に石器時代の遺跡があるか否かは、学界において大きな関心事であった。鳥居の師・坪井正五郎 (1863-1913) は、近畿地方には石器時代の遺跡はほとんどない、との認識であった。一方、鳥居は、大阪毎日新聞社社長の本山彦一 (1853-1932) らとともに、1917 (大正 6) 年に近畿調査を行う。鳥居と本山が協働で調査した主な遺跡は、四ツ池遺跡 (大阪府堺市)、唐古遺跡 (奈良県磯城郡田原本町)、竹内遺跡 (奈良県葛城市)、鳴神貝塚 (和歌山市)、国府遺跡 (大阪府藤井寺市) などである。

調査によって鳥居は、近畿地方における石器時代の遺跡の存在を確信する。その上で、石器と「固有日本人」が作ったと考えた「弥生式土器」が同時に出土すること、また特定の遺跡からは「弥生式土器」と「アイヌ派土器」(縄文土器) が同時に出土することを確認する。一連の調査を通じて鳥居は、先住民族であるアイヌと「固有日本人」は単純な民族の置き換えではなく、共生や混住をくり返しながら、次第に日本人の祖型になっていったと考察する。鳥居は、東アジアでの調査をもとに推察した日本人起源論を、国内の調査を通じて確認し、自身の学説である「固有日本人」論を確立させたのである。鳥居の主張や学説は、1918 年に発行された『有史以前乃日本』に結実する。

#### 【徳島で石器時代を探る】

1922 (大正 11) 年、鳥居は 3 月 27 日から 4 月 4 日までの間、徳島に帰って遺跡等を調査をした。帰郷中は、徳島人類学会の会員や郷土史家の案内で県下各地をまわり、地元のマスコミが彼らの動きを競って報道した。

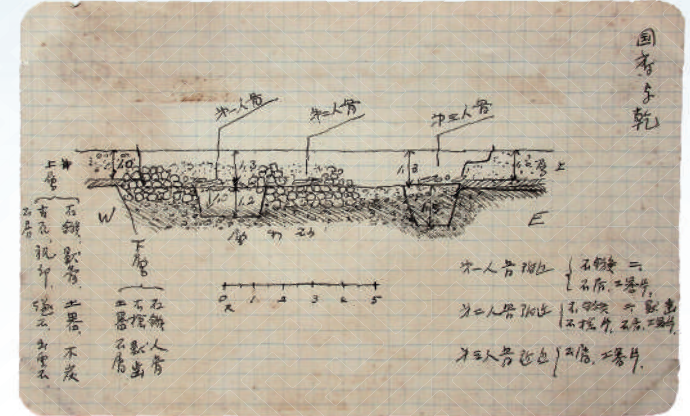
帰京の前日、鳥居らは藩政期に城があった徳島公園を訪れ、城山で貝塚を発見した。鳥居自身が徳島にはないと思っていた、今の縄文人にあたるアイヌの貝塚が、街中に位置する城山で見つかったことから、この発見はたちまちに話題を呼んだ。鳥居は 4 月 19 日に改めて来徳し、5 月 5 日に引き揚げるまで城山貝塚の発掘調査に携わった。確認された貝塚のうち 1～3 号貝塚を中心に、地元協力者の井上達三 (1867-1928)、森敬介 (1888-1947)、前田正一



発掘当時の城山 3 号貝塚  
入口に立つのは鳥居



森敬介「徳島公園城山石器時代遺蹟」草稿  
徳島県立図書館蔵 森が発掘の概要を綴った手記



国府遺跡 人骨出土状況の断面図



鳥居龍蔵宛本山彦一書簡



有史以前乃日本 (1918 年)

(1892-1955) らが、鳥居の指揮を受けて、作業に当たった。その結果、鹹水産の貝の殻や魚類の骨、哺乳類の骨、各種の石器のほか、「アイヌ派土器」や「弥生式土器」等が出土した。鳥居は、岩窟状の 3 号貝塚を住居ないし仕事場の跡と考え、岩窟の入口にある大岩をドルメン (支石墓) であると主張した。城山貝塚の調査により、鳥居は、徳島にも「固有日本人」とアイヌの両方が居住していたと結論づけ、地元の講演会等で語った。



鳥居龍蔵の主要な研究テーマの一つが、日本人起源論であることは、既に述べた通りである。その一方でこの他に、浮世絵などの日本の絵画や、板碑に代表される石造物などにも強い関心を示しており、多様な視点に基づく研究に取り組んでいたことが、当館が整理を進めている膨大な資料からうかがうことができる。

ここでは、このような多角的な研究の中から、特に鳥居が重きをおきライフワークとした、遼の文化と巨石文化に関して紹介したい。

### 1 遼の文化を探る

日本人の起源の探究とともに鳥居が力を注いだのが、中国東北部・内モンゴルに10世紀～12世紀に存在した契丹族の王朝「遼」の文化の研究である。1906(明治39)年、鳥居は妻きみ子とともに現在の内モンゴル赤峰市に所在したカラチン王府へ教師として招かれ、教育に従事する傍らモンゴル語を習得した。1907年～1908年には、妻きみ子と幼い娘の幸子を連れて赤峰から東部モンゴルを北へ縦断し、巴林左旗において上京城と慶州城という二つの都城遺跡を発見した。1929(昭和4)年に、東洋学・アジア学の研究機関である東方文化学院東京研究所の研究員になると、研究題目を「満蒙の有史以前と遼代契丹人の文化に就いて」とし、1930年には、遼最盛期の皇帝の陵墓群である慶陵を初めて本格的に調査した。さらに、3年後の1933年には、きみ子、息子の龍次郎、娘の緑子とともに家族4人で調査旅行を実施し、慶陵において壁画の写真撮影・模写などを行った。時に零下30度の厳しい寒さの中で行われたこれらの調査成果は、1936年に『考古学上より見たる遼之文化』図譜にまとめられている。

鳥居は、1939年に中国・北京のハーバード・燕京研究所に招聘された後も、たびたび内モンゴルを訪ね遼の文化の研究を続けた。その集大成といえる『考古学上より見たる遼之文化』の本文(論考編)についても刊行の準備を進めていたが、ついに出版することなく、その生涯を終えた。



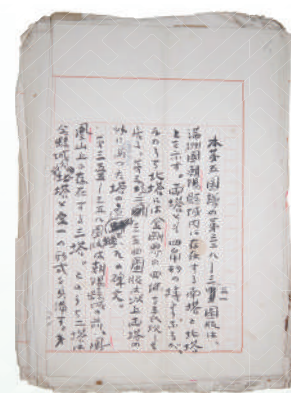
ゲルの前に立つ鳥居龍蔵(左)ときみ子(右)・幸子(中央)



白塔の前に立つ龍蔵(左)ときみ子(右)



慶陵墓室を調査する鳥居ら  
右から緑子、きみ子、龍蔵、龍次郎



考古学上より見たる遼之文化  
図譜 第5冊 解説原稿



緑釉獣面文軒丸瓦・重弧文軒平瓦  
ワールマン八その他採集



遼三彩磚  
慶州城採集

### 2 巨石文化を発見する



析木城のドルメン



中国山東省所在ドルメンのスケッチ

鳥居が、終生継続した研究カテゴリの一つに、ドルメンに代表される巨石構造物の研究がある。鳥居とドルメンとの出会いは、1895(明治28)年の遼東半島調査に求められる。析木城の近傍で、巨大な板石をテーブル状に組みあわせた巨石構造物と出会い、これを翌年、雑誌『太陽』に報告し、東アジアにおけるドルメン確認の先駆けとなった。

大正期における朝鮮半島調査においても、『平安南道・黄海道古蹟調査報告書』で知られるように、石器時代遺跡の調査と併行してドルメンの探査は続けられ、朝鮮半島南部を中心に、分厚い天井石を持つ、朝鮮半島北部・満州とは異なる種類の個体を確認している。1928(昭和3)年には、このような活動の延長線上で、黄海対岸の山東半島においても、同タイプのドルメンを発見し、調査後に東京で行われた講演では、山東省のドルメンと、朝鮮半島南部のドルメンの形態の類似を指摘し、これらの地域間における人類学的・歴史的関係性について言及している。

また、同じ年に山東半島調査に引き続くかたちで愛媛県大洲市でも巨石調査が行われており、朝鮮半島南部、山東半島と共通する形式の巨石構造物を確認し、大きな話題となった。鳥居の巨石調査は、石器時代調査と同様に、遺跡に民族の移動と交流の証を求めるものであった。



愛媛県大洲市巨石調査の風景



鳥居龍蔵が生涯にわたって取り組んだ研究は多岐にわたるが、大正期に完成を見た日本人起源の研究を除けば、多くが未完に終わった。そのうち、鳥居が特に精魂を傾けたのは、契丹族の王朝「遼」の研究であった。図譜4冊で途絶した『考古学上より見たる遼之文化』の本文（論考編）の刊行を志し、おおむね完成の域に達していたと伝えられているが、1冊も世に出ることはなかった。当館には、鳥居の手で整理されバインダーに綴じられた遼研究の原稿が30冊ほどあるほか、題箋の貼られた包みにまとめられただけの研究資料も少なくない。遼に関する原稿は『遼之文化』本文を構成することになるはずだったと思われ、膨大な量に圧倒される。

ところで、遼研究を推進した時期、鳥居はより幅広い研究に取り組んでいる。1941（昭和16）年、アジア・太平洋戦争の開戦後、当時在職していたハーバード・燕京研究所が閉鎖され、鳥居は軟禁生活を強いられた。この時期を中心に、彼は文献の読み込みを重ね、アジア諸民族の概論や中国西南部の苗族に関する著作などの執筆を進めた。これらについても、未完原稿や関連資料が残されている。

とりわけ興味深いのは、20世紀初頭に1度だけしか訪ねたことのない中国西南部の苗族への関心である。苗族について、鳥居はこの系統のインドシナ民族を日本人の源流の一つと考え、銅鐸を用いた人々と見なしたことはよく知られているが、1940年代の中国在任期においても研究対象としていたのである。

鳥居は苗族など、中国西南部の民族を「非漢族」と表現したが、これに注目すると、地理的に対極にあるといってもよい中国北方に展開した遼もまた「非漢族」の国家と言い換えることができる。漢族は、中国大陸はもちろん、東アジア最大の民族集団であり、その周縁にこそ彼の視線が向けられていたのであろう。そう考えると、日本人もまた周縁の民族であり、遼研究の果てには、包括的な漢族周縁の諸民族誌の構築が最後の夢として位置づけられていたのではないだろうか。その意味で、遼やその他のテーマについて残された未完原稿などは、夢の「痕跡」といえる。これらを丁寧に読み解くことで明らかになることは多いに違いない。



バインダー綴じ原稿の一部



苗族之研究論文原稿一



貴州省の苗族 上編  
左の原稿に挟み込まれているが、内容は異なる。

### 関連行事

**展示解説** 日時：令和3年2月14日（日）、2月28日（日）、3月14日（日）13:30～14:30  
場所：文化の森 多目的活動室 ※観覧料が必要、事前申込み不要

**鳥居龍蔵生誕150周年記念国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会—その学問と資料の意義を問う—」**  
日時：令和3年3月21日（日）13:00～17:00  
会場：文化の森 イベントホール ※先着100名（参加無料）

※新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、予定が変更となる場合があります。

協力者  
(50音順、敬称略)

国立民族学博物館、東京大学総合研究博物館、徳島県立図書館  
天羽利夫、大原賢二、鈴木秀夫、高島芳弘、鳥居 喬、湯浅利彦

発行  
編集・発行

2021年2月13日  
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館  
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197  
<https://torii-museum.bunmori.tokushima.jp>

印刷・製本

グランド印刷株式会社